



済生会松山病院 院長 宮岡弘明先生と看護係長の徳野みどりさん

病院の枠を超えた地域連携で 一人ひとりに最適な医療を

医師を中心に、多くの分野のスタッフが精力的に糖尿病診療に取り組む済生会松山病院。
糖尿病患者の増加、高齢化といった課題を抱える中で、地域と連携した医療の在り方について
院長で糖尿病専門医でもある宮岡弘明先生にお話をうかがいました。

糖

尿病は早期の治療と継続的な管理が重要です。しか

し、増加の一途をたどる患者数に対し糖尿病専門医の数は限られ、十分な対応ができていない現状があります。これを解決する鍵となるのが、それぞれの特長を活かした、医療機関の連携による役割分担のシステムです。現在、各地域の実情に合わせて様々な連携の取り組みが進められ、より質の高い診療を実現しているケースが増えています。その一方で乗り越えるべき課題も多く残されています。

また、糖尿病診療の現場では、患者の高齢化への対応が、大きな課題の1つとなっています。加齢に伴って合併症の頻度が高くなる、動脈硬化などの生活習慣病を併発する人が多くなる、自己管理が難しくなるといった高齢ならではの様々な問題があり、生活上の支援や介護を必要とする高齢者の場合、特に深刻です。これからの糖尿病診療では、医療間の連携にとどまらず、福祉、介護と連携し、療養支援をよりスムーズに行う取り組みが求められています。

病院と開業医の連携と共に 医療、福祉、介護の一体化を

済

生会松山病院は、松山市の中心部から少し西側にある西部地区唯一の公的病院で、二次医療圏として65万人ほどを抱えています。患者さんの多くは、瀬戸内海沿岸の島を含めた西部地区、北部地区の方々です。

済生会は創立100周年を迎えました。が、もともと明治天皇が「恵まれない人たちに医療を提供するように」と寄付をしてくださったことから始まりました。松山病院もこの創立の精神に基づき、医療を通じた地域貢献を目指していま



宮岡弘明先生 Hiroaki Miyaoka

済生会松山病院 院長

1981年鹿児島大学医学部卒業。愛媛大学医学部附属病院、市立八幡浜総合病院、国立療養所愛媛病院等に勤務。92年済生会松山病院内科医長、内科部長、副院長を経て、14年より現職。専門分野は糖尿病、肝臓学、臨床栄養学。日本糖尿病学会、日本内科学会、日本消化器病学会等に所属。



1980年から開催されている昼間の糖尿病教室に続き、2000年からは夜間糖尿病教室が始まった。医師、栄養士、看護師が毎回講義を行う他、臨床検査技師、薬剤師、理学療法士が3カ月に1度交替で講義を担当するなど、チームで協力して運営している。さらに、年に2回は患者さんの体験談と外部講師による特別講義も行われる。他の医療機関で治療中の患者さんや家族の参加も歓迎で、時には他の医療機関で働くスタッフも参加する。

病院内外の連携の強化が鍵

糖尿病では、合併症の予防と早期発見・早期対応が最も大事です。そこには眼科、皮膚科、循環器科、泌尿器科、外科など、ほとんど全ての診療科が関係してきます。松山病院「甲状腺糖尿病センター」は、他の診療科と緊密に連携しながら、医師、看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士、臨床検査技師などで構成される糖尿病チームが一丸となって診療と療養指導を行っています。

す。離島の巡回診療はその取り組みの1つで、瀬戸内海の島々で医療施設のない所、常勤の医師がない所などを診療船「済生丸」で定期的に巡り、病院に来るのが難しい方々のために健康診断をしています。こうした離島では高齢の方が多いのですが、私の専門である糖尿病においても、患者さんの高齢化が進んでいます。これは全国共通のことで、今後の糖尿病診療における大きな課題の1つではないかと思っています。

PICK UP!

フットケア外来

糖尿病で最も起こりやすい合併症の1つが、神経障害による潰瘍^{かいよう}や壊疽^{えいそ}などの足病変です。済生会松山病院甲状腺・糖尿病センターでは「フットケア外来」を設け、糖尿病看護認定看護師と外来看護師が療養指導の一環としてフットケアを行っています。フットケアは処置が中心ではなく、患者さんが日常生活の中で自分で足のケアを行えるよう指導する予防的フットケアを基本としています。



看護係長の徳野みどりさんは、糖尿病看護認定看護師の資格を持つ糖尿病療養指導のエキスパート。糖尿病患者さんの療養指導では多くの職種のスタッフが結集し、チーム医療に取り組んでいる。



地域連携の必要性が増す中、済生会松山病院では隔月で「松山西部糖尿病連携サークル」と称した情報交換の場を設けている。現在は松山病院と連携する開業医の先生や病院のスタッフの20名余りが参加。

また、昼間や夜間の糖尿病教室を開き、患者さん自身に学んでいただく取り組みも続けています。糖尿病はかかりつけ医とこのような病院の両方で治療を進めていくのが一番よいと思います。具体的には、合併症が少なく比較的にコントロールのよい方は普段は開業医の先生にかかり、3〜4カ月に1度病院に来ていただく。ただ、患者さんには大病院指向があり、このシステムもなかなか難しいのが実情です。

今後は開業医の先生と病院がより連携を密にし、何かあればすぐに病院で対応できることを患者さんに納得してもらえようようにしていきたいと思っています。

また、院内の「地域連携室」では、他医療機関の紹介や、紹介患者さんの受け入れをお手伝いしています。

医師やスタッフ間の連携は糖尿病治療では特に大事ですが、そこではある程度共通の知識や技術が必要になります。

松山病院では「松山西部糖尿病連携サークル」と称した情報交換の場を設け、当院と連携してくださっている開業医の先生と当院のスタッフが参加して一緒に勉強しています。

医療から介護まで一生をサポート

これからの糖尿病領域の課題としては、先ほど述べた患者さんの高齢化への対応があります。例えば独居の高齢者の方で、自分でインスリンを打つのが難しい場合、訪問看護ステーションやデイケア、ショートステイなどの施設との連携が必要です。こうした医療と福祉、介護との連携もこれからますます大事になってくると思います。

この連携という面では、当院には病院と院外の老人保健施設や特別養護老人ホーム、在宅支援セ

ンターなどを統括した「松山医療福祉センター」があり、とても充実しています。これらが連携すること、入院治療が一段落した後スムーズに次のサービスへと移ることができ、病院の専門スタッフが施設に向いて療養をフォローすることもできます。

この連携をさらに深めるために、現在、関連施設の方たちと3カ月に1回集まり、地域交流を兼ねた会議をしています。

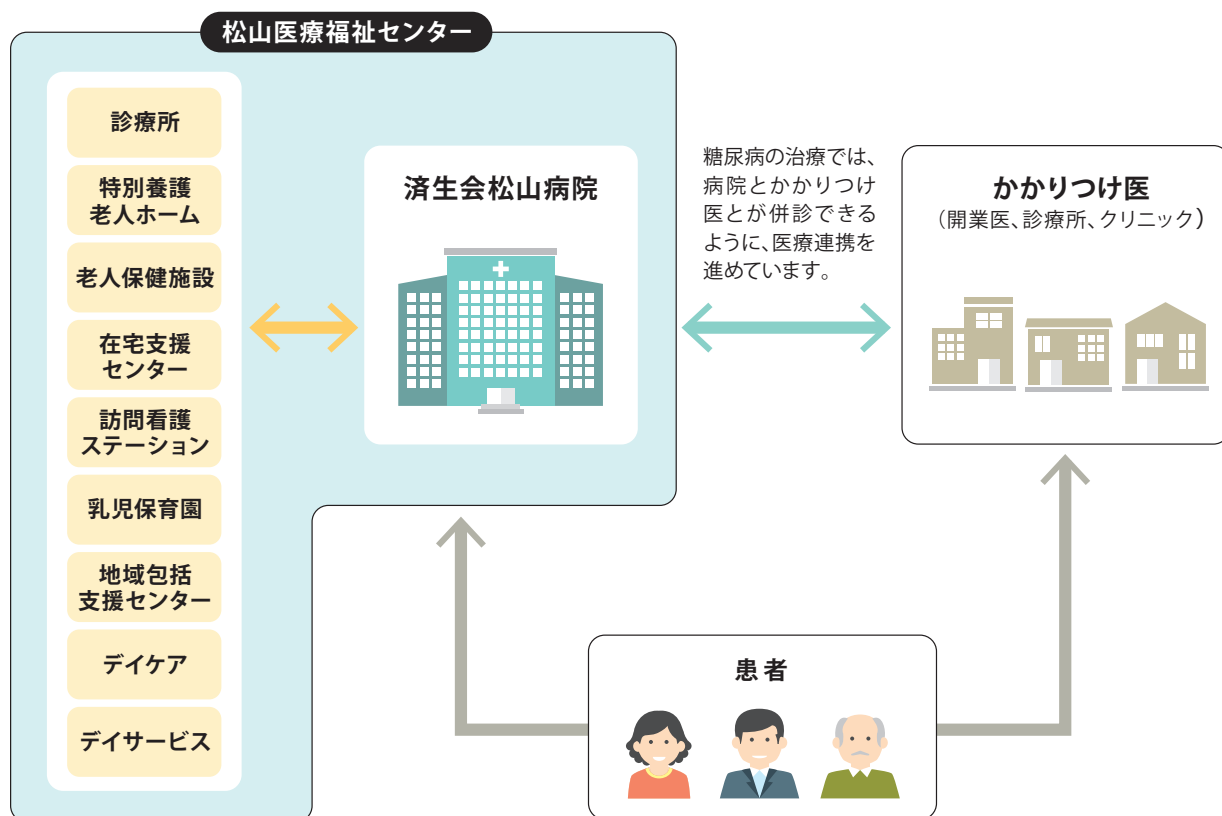
将来的には医療も介護も複合的にして、病気だけでなく人の一生をサポートしていくことができればよいですね。

済生会松山病院 地域連携の仕組み

全国で医療・保健・福祉活動を展開する済生会には、各地に病院とその関連施設を統括する医療福祉センターがあります。済生会松山病院に拠点を置く「松山医療福祉センター」は、院外に診療所、特別養護老人ホーム、老人保健施設、在宅支援センター、訪問看護ステーション、乳児保育園、地域包括支援センター、デイケア、デイサービスの9種類10施設を有し、これらの連携で、

病院での医療が一段落した後、継ぎ目なく次のサービスに移ることができます。

また、松山病院では「地域連携室」を設け、患者さんを他の施設から受け入れるとき、逆に患者さんを病院から他の施設に紹介するときに円滑に安心して移動ができ、最適な医療サービスを受けられるようサポートしています。



DATA

済生会松山病院

〒791-8026
愛媛県松山市山西町880番地2
TEL: 089-951-6111 (代)
FAX: 089-953-3806
URL: <http://db.matsuyama.saiseikai.or.jp>

〔診療科目〕

内科、外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科、婦人科、眼科、放射線科、循環器内科、皮膚科、耳鼻咽喉科、神経内科、リハビリテーション科、麻酔科

